C. ochthodes NORDST., *C. pygmaeum* ARCH. など13種程が報告されている。

DIVISION　EUGLENOPHYTA
Class　Euglenophyceae
Order　Euglenales
Family　Euglenaceae

BRACHER, R. (1929) や JAHN, T. (1946) によると *Euglena* のある種においては，土壌表面がパルメラ状の形態のもので被われ，着色されることがあるという。しかし，一般的にこの科のものは土壌には少ない。

Euglena EHRENB., 1838. FRITSCH と JOHN (1942) は英国の土壌から *E. mutabilis* SCHMITZ を報告している。

故 木下虎一郎博士の追憶

山田幸男

本誌前号の報知にもある通り本年3月23日，本会々員農学博士木下虎一郎氏が永らくの闘病の後小樽市の自宅に於いて逝去された。誠に痛恨の至で悲みにたえない。自分は北海道へ来てから博士が元気で，主として北海道の浅海増殖，特に海藻の調査研究に従事された間いつも相談をうけ，又自分の研究上には計り難い教示をうけ言葉通り共に手を携えて海藻の仕事に従来してきたと言えると思ふ。従って同氏の訃に接し誠に言表はし様のない悲しみと淋しさを痛感するのである。

博士は明治36年4月7日和歌山県田辺市に生れ，県立田辺中学を経て東京水産大学の前身農林省水産講習所に学び大正13年3月養殖科を卒業，神奈川，和歌山両県の水産試験場に奉職の後昭和8年北海道水産試験場に赴任された。そしてその直後から吾々の協力が初まったのである。それというのは同氏は水産講習所在学中から故岡村金太郎先生の指導をうけ，その誠実な人格，又その真摯にして熱心な研究態度等から先生の注目されるところとな

り，已にその頃から本邦水産，特に浅海増殖を進歩発展せしめる有為の青年として矚目されてをられたので，自分は木下博士には未だ会う前から，将来共に助けあって仕事をする様にと岡村先生からうかがっていたし，博士も亦，これは後に博士自身からきいたことであるが，先生からほぼ同様なことを聞いていられた由を聞いたことがある。その様なことで吾々はお互に初対面の時から既に旧知の様な親しみを感じあったのである。

余市へ赴任後博士の絶倫な精力は主として北海道の浅海増殖の調査研究に向けられ，ノリ，コンブ，ワカメ，フノリ，ギンナンソウ等の海藻類又アワビ，ホタテ，カキ，ホッキ，ナマコ等々本道の浅海増殖に関する主なものは皆博士の調査研究の対象となり，実に数多くの業績があげられた。従って本道の沿岸は勿論氏の足跡到らざる所はないが，特に有珠湾と佐呂澗湖とは氏にとって誠に忘れ難い記念の場所ではないかと思われる。特に博士のノリ養殖に関する仕事は主としてこの二地区に於いて行なわれたとも言えるであろう。その一例としてスサビノリの夏ノリの試験研究について記るすと，昭和16年北海道は著しい冷夏に見舞はれ，8,9月に於ける有珠湾の水温も摂氏20度を超えること極めて稀で，主としてその為であろうと思われたが，所謂夏ノリの発育著しく，それが博士をして，平年に於いて常に有珠湾よりも水温の低い佐呂澗湖への夏ノリの移植を思い立たしめたのである。かくして種々調査の末この考えは早速同年8月から実行に移され，見事な結果をあげ，その翌年もその試験移植が行なわ同様な結果が見られた。これは故人が有珠，佐呂澗に於いて行なった試験，研究のホンの一部にすぎず，此他有珠に於いてはカキ，フノリ，ワカメ，コンブ等，佐呂澗に於いてはホタテ，カキ，コンブ等の研究調査が行なわれ，此等が後年有珠，佐呂澗に夫々海藻類人工採苗所が設置されるに際し重要な礎石となっていることは何人も否むことは出来ない。

又戦時中は軍からの要求で加里，臭素の原藻を増産することになり，北海道水産課，同水産試験場並に北大が協力してその衝に当った。交通，諸物資等万事不自由な際に種々な困難をおかして道内各地を博士と共に調査，指導等に巡った憶出は，日夜寝食を共にして博士からその人となりに就いてうけた深い印象と共に生涯忘れえないものである。

終戦後氏は昭和22年に農学博士の学位を，25年には日本農学賞，北海道新聞文化賞，34年には農林大臣賞を受けたが残念なことに終戦後間もなく

健康を損じ34年末頃から自宅療養，入院等を繰返さざるをえない状態となった。然しその間病床上にあっても書類を見る等その責任感の強さは見る人を驚かせた。そして37年11月には永年勤務した北海道水産試験場を退職，以後小樽市の自宅に於いて病を養ってをられたが，遂に病にかてず本年3月23日不帰の客となった。

今故人を追憶するに当りつくづくその畏敬すべき人となりが偲ばれ，精力的に行なわれた数々の遺業が次々と想起されるが，何としても天が博士の健康を，せめてその退職の時までで，昔の儘に保つ様ゆるさなかったことは返す返すも残念でならない。

切に博士の御冥福を祈る。

バラクリシュナン博士の来日

カクレイト科 Family Cryptonemiaceae のメンバーを主体に，真正紅藻類の嚢果形成と分類の研究を進めているインドの Poona 大学の Dr. M. S. BALAKRISHNAN が，アメリカのワシントン大学付属フライディハーバー臨海実験所での14ケ月の研究滞在を終え帰国の途中，5月26日日本に立寄った。さきに連絡をうけていた千原が羽田空港に出迎えた。その夕ただちに札幌に飛び，山田幸男本会名誉会長および御子息の山田真弓教授(教授とはフライデイィハーバーで，3ケ月一緒だった由)の歓待をうけ，翌27日北大理学部の藻類学研究室の方達と会い，28日再び東京へ戻った。29日，30日には，国立科学博物館や東大水産植物学研究室を訪れ，短時間ではあったが，日本産カクレイト目やウミゾウメン目の標本を前にして，興味ある見解を披瀝した。30日夕香港経由で帰国した。

(国立科学博物館・植物・千原光雄)

本会会員 Dr. E. Yale DAWSON は，6月22日エジプトで潜水採集中，事故のため逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

日　本　藻　類　学　会